

血管・小児外科学分野担当教授巻頭言

大木隆生

私は血管外科と小児外科の分野担当教授兼診療部長（小児外科は代行）を務めておりますのでこの2つの診療部の一年を振り返りつつ、来年度に向けての抱負を述べます。

血管外科診療部にとって2008年度は忘れられない年となりました。数々の目標が達成できましたが特筆すべき事がいくつかあります。第一に腹部大動脈瘤ステントグラフト症例数世界1と胸部大動脈瘤ステントグラフト術日本一を達成したことです。47都道府県のすべてから患者が来院し、関東にある医科大学25のすべてから患者の紹介を受けました。動脈瘤以外にもたくさんの動脈手術を施行し、診療報酬請求額は対前年度40%アップ、赴任前の対16年度比ですと8,500%アップ（85倍）となる18億円でした。慈恵にある32の月別診療科別診療報酬請求額においては、経理上細分化されていない小児科（内科は9つ、外科は6つの診療科に細分化）が過去10数年一度もトップの座を明け渡したことがありませんでしたが、2008年2月には血管外科単独で1位の座につきました。人口の高齢化と認知度アップによりこの右肩上がりの傾向は当分の間継続できそうです。

学術研究においても飛躍できました。詳細は本書の業績集に記載されていますが、2008年の第36回日本血管外科学会総会においては採択演題数が21と断トツの日本一でした。さらに2008年7月には第50回国際脈管学会を主宰しましたが開会式には栗原学長とともに渡邊恒夫読売新聞主筆が祝辞を述べてくださり花を添えていただきました。世界25カ国から多くの参加者が集い大いなる成果を上げることができました。テレビ出演回数は5回、全国新聞5回でしたが、まだ認知度の低い「血管外科」という診療科の認知度アップと「慈恵医大」のブランドイメージアップに貢献できたと思います。

スタッフの充実も図ることができました。他学から多くの途中入局の応募がありましたが、中でも優秀だった2人（石田厚 千葉大60卒と田中克典 慶応大平成7年卒）を仲間として迎え入れました。2008年までは、年間800に及ぶ手術のほぼすべての手術承諾書を診療部長が取り、ほぼすべての手術に指導的術者として手洗いしましたが、血管外科スタッフの実力アップが図られた今年から、診療部長の介在しない手術を徐々に増やしていく計画です。こうすることでさらなるスタッフの技術向上と「一人立ち」を図りたいと思います。これまでに慈恵関連以外も含め多くの病院からスタッフ派遣の要請がありましたが、スタッフが増え、またそのレベルが向上したことにより、その要請に答え始められるのではないかと考えています。さらに、他学における血管外科教授を慈恵から輩出できる機が

熟してきました。以上のように2008年度中に血管外科は数多くの事を達成しましたが、私が診療部長として一番誇りに思っていますのは、血管外科のチームワークの良さであります。各スタッフは高いモチベーションを維持しながら常に自分のことよりチームのことを考えています。診療部長としてスタッフの一人一人を誇りに思うと共に感謝しています。

他方の小児外科分野においても昨年度は素晴らしい年となりました。世間の小児医療の充実を求める声を追い風に、各地で周産期センターの開設や増床が行われています。派遣病院の川口医療センター・町田市立病院においても小児外科医の増員が求められ、留学から帰国した田中圭一郎が町田市民病院へ、そして新入局の馬場優治（平成19年卒）を川口医療センターへ派遣し、小児外科2名ずつによる診療の充実をはかることができました。また、レジデントの平松友雅（平成17年卒）も小児外科を志望しており、小児外科の充実が着実なものとなってきました。本院においては手術件数が年々増加して、約400例の手術をおこないました。特に漏斗胸に対するNuss手術件数は全国3位の手術件数でありました。鼠径ヘルニアに対する腹腔鏡手術も年々増加して80例をおこないました。国際学会の発表も3演題おこない、国内学会では、内視鏡外科関連の演題をシンポジウムで発表をおこないました。本院の小児外科は4名と少ないスタッフながら、このように臨床・研究・教育のすべてにおいて良く頑張ってくれたと思います。2009年度は、さらに小児外科スタッフの充実を図る事が最大の目標であります。